

れた。歯科医師会はこの頃、大正 15 年に施行された健康保険法や、学校歯科医設置の問題と共に、歯科軍医制度設置問題が最重要課題であった。

健康保険法は大正 11 年 (1922 年) 公布され、学校歯科医については昭和 5 年、学校歯科医および幼稚園歯科医令が公布され、残るは歯科軍医問題となった。

昭和 7 年 (1932 年) 2 月 3 日、日本歯科医師会は陸軍に対しては陸軍大臣、陸軍省医務局長宛、海軍に対しては海軍大臣、海軍省医務局長宛上申書を提出、同年 6 月 25 日、同じく陸海軍大臣、医務局長宛、請願書を提出した。この請願書は歯科保健、衛生の問題、治療の問題、第一次世界大戦に於ける戦訓の外、戦死者の識別の問題にも触れている。そして日本歯科医師会役員、委員、各道府県歯科医師会役員、各歯科医学専門学校教職員その他 2,133 名の署名を得て、杉山元治郎 (社会大衆党)、坂本一角 (政友会)、工藤鉄雄 (民政党) の三議員の紹介により衆議院に提出、8 月 26 日、請願委員会に於て採択された。

海軍省医務局長は、昭和 2 年に大貫安三軍医中將、昭和 3 年に小川龍軍医中將、昭和 7 年に国府田中軍医中將、昭和 9 年には高杉新一郎軍医中將と目まぐるしく変った。第一次世界大戦以後は、航空医学、潜水艦医学の研究に力を注いだ。又、上海事変に於ける陸戦隊には、各地の作戦部隊に夫々陸戦装備の医務隊が編成され、傷病兵の治療にあたり、活躍した。

然し乍ら、歯科軍医制度の確立は望み薄い感があった為、各地で之が推進を迫る運動が起きた。

昭和 6 年末、全国歯科医学専門学校歯科軍医獲得学生連盟が陸海軍当局に直接建議書を出し、九州歯科医学専門学校学生会総務より各方面に通知状及び建議書を配付し、本制度の早期実現を訴えた。これから軍隊に入る学生には切実な問題であった。

19) 昭和 7 年当時の歯科新聞の記事から

From the Dental Newspaperes in 1932

日本大学松戸歯学部 ○吉井 秀鑄
渋谷 鉦
石橋 肇
山口 秀紀
佐久間 優
谷津 三雄

Hidetoshi Yoshii, Koh Shibutani, Hajime Ishibashi, Hidenori Yamaguchi, Yutaka Sakuma and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

榊原悠紀田郎著「歯科医学史講座要旨」(1990)の歯科雑誌の発達の項に、1910 年代に入ると評論誌が歯科界をにぎわし、1914 年 4 月には歯科雑誌記者団をつくることになり、そのときのメンバーに歯科新報、歯科評論、歯科公論、歯口世界、歯科医事新聞、歯科学報などである。また、1919 年には大日本歯科新聞雑誌協会が作られたときも大体 6 つ程度であった。それが 1926 年にこの協会は歯界時報、歯科医報、東洋歯科月報、歯苑、日本口腔衛生、歯科学報、歯科新報、歯科新論、歯界公論、歯科評論、日本歯科新聞の 11 種であった。

1932 年の時には、大体、毎月定期的に出していたものは歯科学報、歯界公論、日本歯科学会雑誌、新歯科医報、日本口腔衛生、日本之歯界、歯科月報、日本歯科新聞、昭和歯科評論、臨床歯科、歯科時報、台湾歯科月報、朝鮮の歯界、歯科医学新報、熊本歯科新聞、歯科毎月通信の 16 種であり、このほかに不定期あるいは季刊の程度のものが 7 種であったと記されている。そこで演者らが架蔵しているこれらの歯科雑誌のうち、日本歯科新聞、第百三十四号、昭和 7 年 1 月 25 日発行、第百三十八号、昭和 7 年 5 月 25 日発行と歯科医事新報第二百七十一号、昭和 7 年 5 月 20 日号を資料とし、その当時の歯科界の概要を報告する。日本歯科新聞は毎月 25 日 1 回発行、発行編集人 赤尾醉仙、発行所 大阪市西成区の日本歯科新聞社、本紙購読料 1 ヶ年金壹円五拾銭、広告料 14 字詰 1 行金 50 銭、特別の場合は御相談可申候とある。本号の 1 ページには社説、“一路国産へ本質を認めよ”、“審査内規を厳にして学位浄化を敢行、乗出した当局

対策講究”，2 ページには“血脇と中原(一)両校長の特色とその校風”，3 ページは森田歯科の広告，4 ページは説苑で，向井嘉男の“学校歯科の体系”，5 ページは日本歯科商社の賀正と広告，6 ページは“向井嘉男の学校歯科医の心持”，喜多見行正の“金輪再禁の歯科的打診”，水口耕治の“養活”，7 ページは森田歯科の謹賀新年と広告，8～9 ページは高山紀斎ほか当時の一流歯科医の謹賀新春が掲載されている，10 ページは松風の広告，11 ページは国際歯科連盟根管治療法懸賞規定とライオン歯磨の広告，12 ページは臨時総会を開いて指定医等を制裁か，13 ページは自由放送，14 ページは有材歯科の広告，15 ページは“除外者の入会申込に感情衝突で一波乱”，“阪大医学部に歯科講座復活”のほか，大阪歯科医学専門学校，東京歯科医学専門学校，京北高等歯科医学校の学生募集の広告，16 ページ広告で占められている。

歯科医事新報は昭和6年12月9日第3種郵便認可，発行日毎月20日1回，発行兼編輯人 栗原信四郎でその第二百七十一号，昭和7年5月20日号の1 ページは“沈黙の雄弁，血脇氏の猛省を促す”，“学位令改正に文部省大乗り気，歯科医博の実現は今，イカサマ教科書，インチキ博士の取締も厳に”，“博士号授与に改正の意見，文部省調査を急ぐ”，また「人事往来」がある，2 ページは“第6回東北六県歯科医師大会”，「「バー」の微傷から敗血症，死去した唐木氏”，3 ページには“葉桜の水戸に茨城日歯校友大会，中原校長を迎えて，益々団結し躍進す”，4 ページには中原先生の外遊詠草や山口白映生の欧米歯科界の印象，5 ページには“愛煙家への警鐘，葉巻や堅いパイプで煙草を吸うと口腔癌になる”，6 ページには社会歯科欄，歯科質問欄，7 ページには，学校ニュースで，日本歯科，日大歯科，東京高歯，東洋女歯などのニュースがのっている，8 ページは広告，なお，本紙は広告料14字詰1行50銭，特別の場合は御相談可申候とあり，各ページの下段はほとんど広告が占めている，本紙の購読料一部10銭，12ヶ月1円20銭とある。

なお，日本歯科新聞第百三十四号（昭和7年1月25日）に「大日本歯科新聞雑誌協会」加盟各社（いろは順）の社名が次の如く掲載されている，日本口腔衛生社，日本歯科学会雑誌，日本歯科新聞社，臨床歯科発行所，新歯科医報社，歯科医事新

報社，歯海公論社，歯科月報社，歯科時報社，歯苑社，昭和歯科評論社の11社である。

これらの2紙から昭和7年当時の歯科界を振り返ってみたい。

20) 60 年前の歯科学生生活状況

The Condition of Dental Students 60 years ago

日本大学松戸歯学部 ○落合 俊輔
渋谷 鉦
石橋 肇
吉井 秀鑄
山口 秀紀
谷津 三雄

Shunsuke Ochiai, Koh Shibutani, Hajime Ishibashi, Hidetoshi Yoshii, Hidenori Yamaguchi and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

戦前に比べ戦後の大学生は歯科医学専門学校から歯科大学に，また，日本経済も目覚ましく発展を遂げ，飽食時代やマイカー族も増え，大学生の生活や環境も大きくさまがわりをした，そこで，今から約60年前の昭和10年に日本歯科医師会が後援し，社会歯科医学会が当時の歯科医学専門学校の在學生について調査した今田見信，今井信一執筆著「歯科医学専門学校生徒の生活環境並びに生活状態の調査」（社会歯科医学会雑誌第6巻第3，4号，昭和15年5月号）を参考資料として報告する。

調査内容は，1. 身上に関するものは，(1)校別，(2)入学年度，(3)生年月日，(4)父兄の職業，(5)出身地，(6)家族，(7)現住所，(8)卒業後の方針，(9)信奉せる主義の世界観，2. 生活様式に関するもの，(1)食事，(イ)朝食（校内，校外），(ロ)昼食（校内，校外），(ハ)夕食（校内，校外），(2)住所（自宅，親戚，知人，下宿…），(3)通学（省線，市電，バス，会社線，徒歩のみ），(4)学業，(イ)講義外の主なる勉強場所，(ロ)講義外1日平均勉強時間，(ハ)加入せる学会研究会，(ニ)併集中の専門外の科目，(5)スポーツ，(イ)主な種類，(ロ)スポーツに費やす1日平均時間，(6)修養，(イ)方法，(ロ)加入せる修養会名，(ハ)最も崇拜せる人物，(7)趣味娯楽，(イ)種類，(ロ)加入せる社交